

令和3年度県民健康調査「健康診査」 (16歳以上) 結果報告

<補足事項>

※16～39歳、40～64歳、65歳以上の3つの年齢に区分し、グラフ化した。

※全く同じ母集団ではなく、経年的な変化を比較することが出来ないため、断定的なことは言えない。

※集計結果の表章記号の規約は、厚生労働省の人口動態調査と同様に表記した。

計数のない場合

—

比率が微小(0.05未満)の場合

0.0%

※参考資料

平成23～26年度 ; 第21回検討委員会資料3-2「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成27年度 ; 第26回検討委員会資料3-2「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成28年度 ; 第30回検討委員会資料2-3「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成29年度 ; 第34回検討委員会資料2-3「健診項目別受診実績基礎統計表」

平成30年度 ; 第37回検討委員会資料4-4「健診項目別集計結果」

令和元年度 ; 第41回検討委員会資料3-4「健診項目別集計結果」

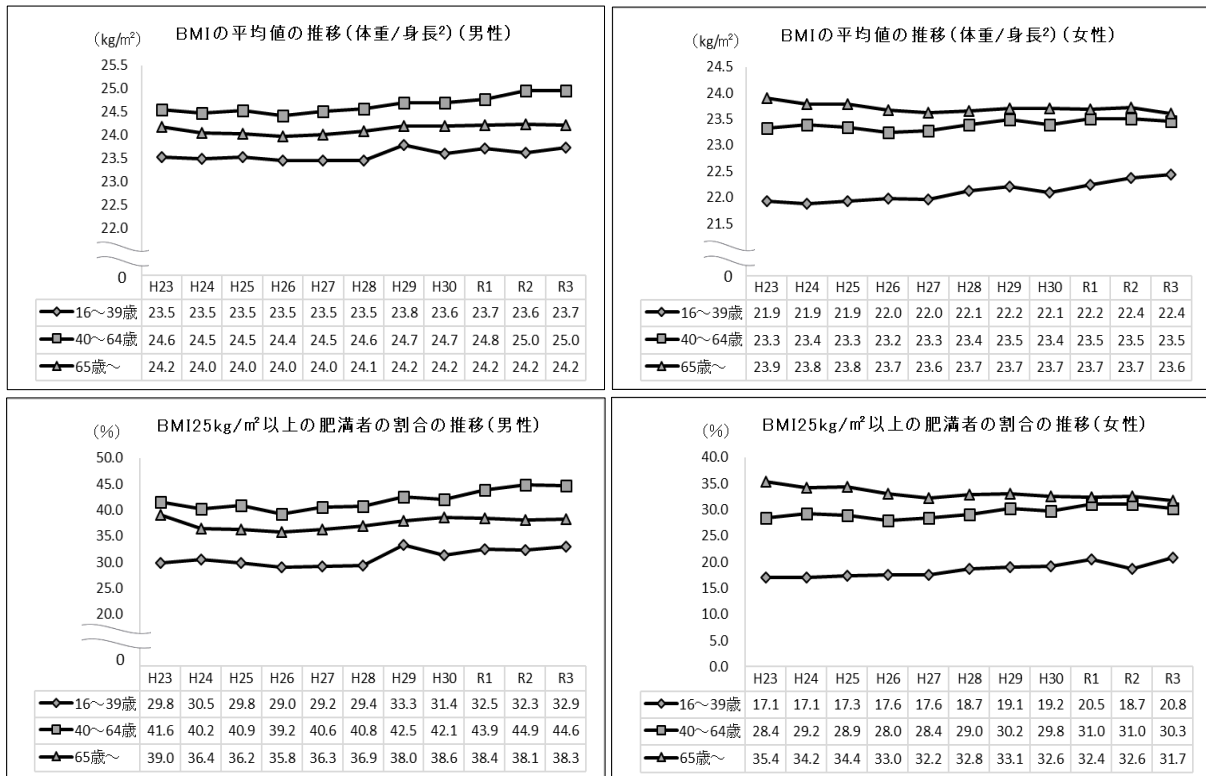
令和2年度 ; 第44回検討委員会資料4-4「健診項目別集計結果」

身体検査 (BMI)

1 結果

BMI25kg/m²以上の男性の割合は、全ての年齢区分において平成28年度に比べ平成29年度に増加し、その後、令和3年度にかけては大きな変化はみられなかった。

BMI25kg/m²以上の女性の割合は、16～39歳で平成23年度から令和3年度にかけてやや増加傾向がみられた。40～64歳は、平成26年度から令和2年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、令和3年度にやや減少傾向がみられた。65歳以上は、平成23年度から令和3年度にかけてやや減少する傾向がみられた。



2 グラフの説明

身長と体重の測定値からBMIを算出し、25.0以上を肥満と判定した。

$$\text{BMI} = \text{体重 (kg)} \div \text{身長 (m)} \div \text{身長 (m)}$$

3 参考基準値

肥満度分類

| BMI (kg/m ²) | 判定 | WHO 基準 |
|--------------------------|--------------|-----------------|
| BMI < 18.5 | 低体重 | Underweight |
| 18.5 ≤ BMI < 25 | 普通体重 | Normal range |
| 25 ≤ BMI < 30 | 肥満 (1度) | Pre-obese |
| 30 ≤ BMI < 35 | 肥満 (2度) | Obese class I |
| 35 ≤ BMI < 40 | 高度肥満 肥満 (3度) | Obese class II |
| 40 ≤ BMI | 高度肥満 肥満 (4度) | Obese class III |

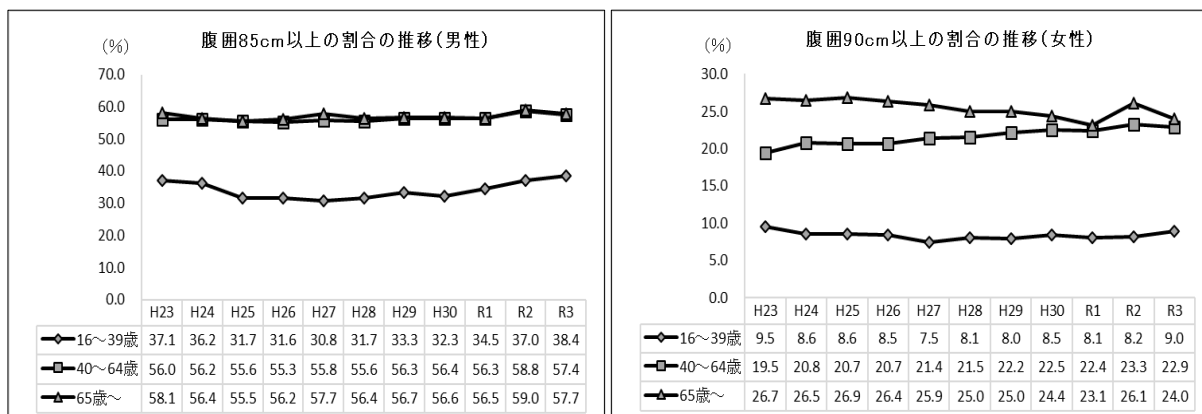
出典：日本肥満学会作成「肥満症診療ガイドライン2022」

身体検査（腹囲）

1 結果

腹囲 85cm 以上の男性の割合は、16～39 歳で平成 23 年度から平成 25 年度にかけて減少傾向がみられ、その後、令和 3 年度にかけてやや増加する傾向がみられた。

腹囲 90cm 以上の女性の割合は、40～64 歳で平成 23 年度から令和 2 年度にかけて増加傾向がみられ、令和 3 年度はやや減少する傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、メタボリックシンドロームの診断基準であるウエスト周囲径（腹囲）を評価した。

3 参考基準値

メタボリックシンドロームの診断基準

| | | |
|---|----|---------------|
| 内臓脂肪（腹腔内脂肪）蓄積 | | |
| ウエスト周囲径 | 男性 | ≥ 85 cm |
| | 女性 | ≥ 90 cm |
| (内臓脂肪面積 男女とも ≥ 100 cm ² に相当) | | |
| 上記に加え以下のうち2項目以上 | | |
| 高トリグリセライド血症 | ≥ | 150 mg/dL |
| かつ/または | | |
| 低 HDL コレステロール血症 | < | 40 mg/dL 男女とも |
| 収縮期血圧 | ≥ | 130 mm Hg |
| かつ/または | | |
| 拡張期血圧 | ≥ | 85 mm Hg |
| 空腹時高血糖 | ≥ | 110 mg/dL |

出典：メタボリックシンドローム診断基準検討委員会作成

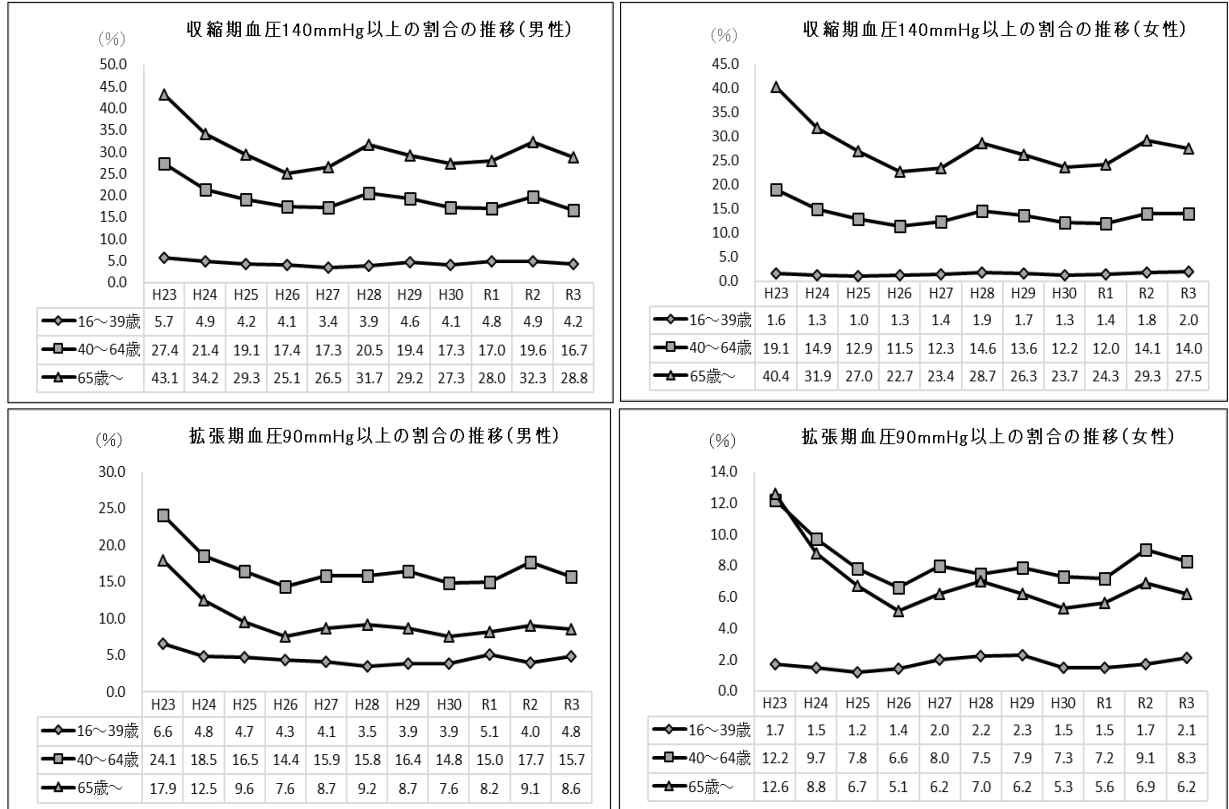
「メタボリックシンドロームの定義と診断基準（2005年）」

身体検査（血圧）

1 結果

収縮期血圧 140mmHg 以上の割合は、40 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から平成 26 年度まで減少傾向がみられ、その後は増加と減少を繰り返す傾向がみられた。

拡張期血圧 90mmHg 以上の割合は、40 歳以上の男女ともに、平成 23 年度から平成 26 年度まで減少傾向がみられ、その後は一定の傾向を示さなかった。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、収縮期および拡張期高血圧を判定した。

3 参考基準値

成人における血圧値の分類

| 分類 | 診察室血圧 (mm Hg) | | 家庭血圧 (mm Hg) | |
|-------------|---------------|----------------|--------------|--------------|
| | 収縮期血圧 | 拡張期血圧 | 収縮期血圧 | 拡張期血圧 |
| 正常血圧 | <120 | かつ <80 | <115 | かつ <75 |
| 正常高値血圧 | 120-129 | かつ <80 | 115-124 | かつ <75 |
| 高値血圧 | 130-139 | かつ/または 80-89 | 125-134 | かつ/または 75-84 |
| I 度高血圧 | 140-159 | かつ/または 90-99 | 135-144 | かつ/または 85-89 |
| II 度高血圧 | 160-179 | かつ/または 100-109 | 145-159 | かつ/または 90-99 |
| III 度高血圧 | ≥180 | かつ/または ≥110 | ≥160 | かつ/または ≥100 |
| (孤立性)収縮期高血圧 | ≥140 | かつ <90 | ≥135 | かつ <85 |

出典：日本高血圧学会作成「高血圧治療ガイドライン 2019」

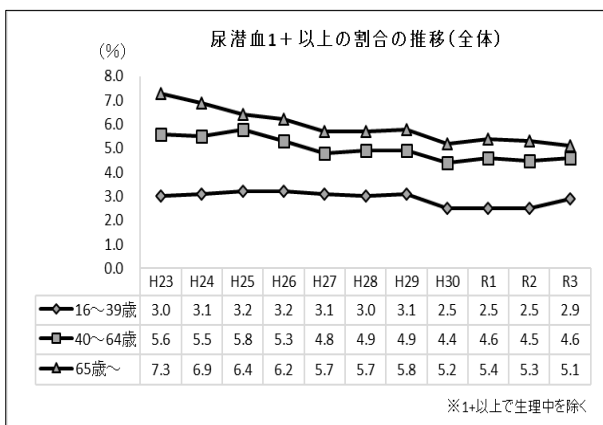
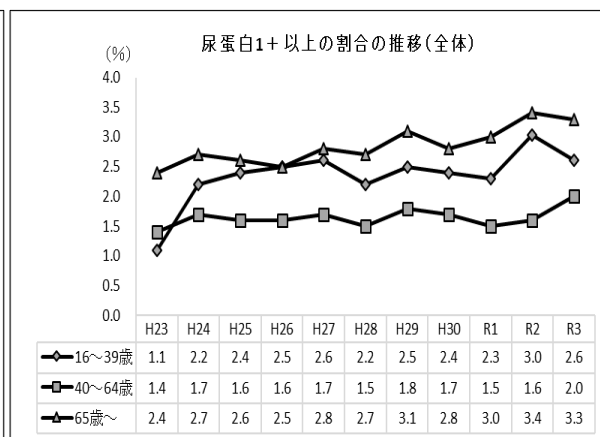
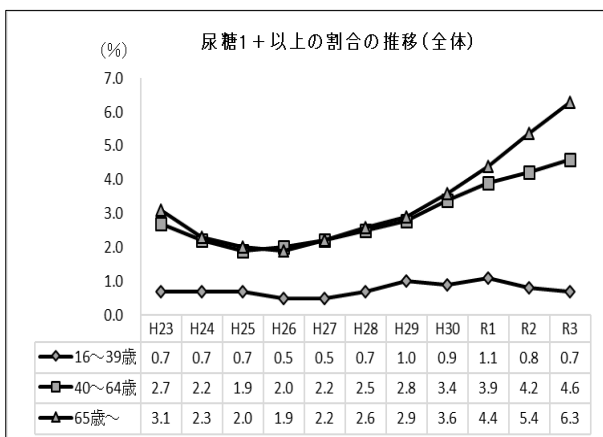
尿検査（尿糖、尿蛋白、尿潜血）

1 結果

尿糖 1+以上の割合は、40 歳以上において、平成 27 年度から増加傾向がみられた。

尿蛋白 1+以上の割合は、16～39 歳と 65 歳以上の年齢区分において、平成 23 年度から令和 2 年度まで増加傾向がみられたが、令和 3 年度はやや減少傾向がみられた。

尿潜血 1+以上の割合は、65 歳以上では、平成 23 年度から令和 3 年度まで減少傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、検尿異常を判定した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

| 項目 | 判定区分 | 基準範囲内 | 軽度異常 | 異常 |
|-----|----------------|-------|------|----|
| | | | | |
| 尿糖 | (-) (±) (+) 以上 | | | |
| 尿蛋白 | (-) (±) (+) 以上 | | | |
| 尿潜血 | (-) (±) (+) 以上 | | | |

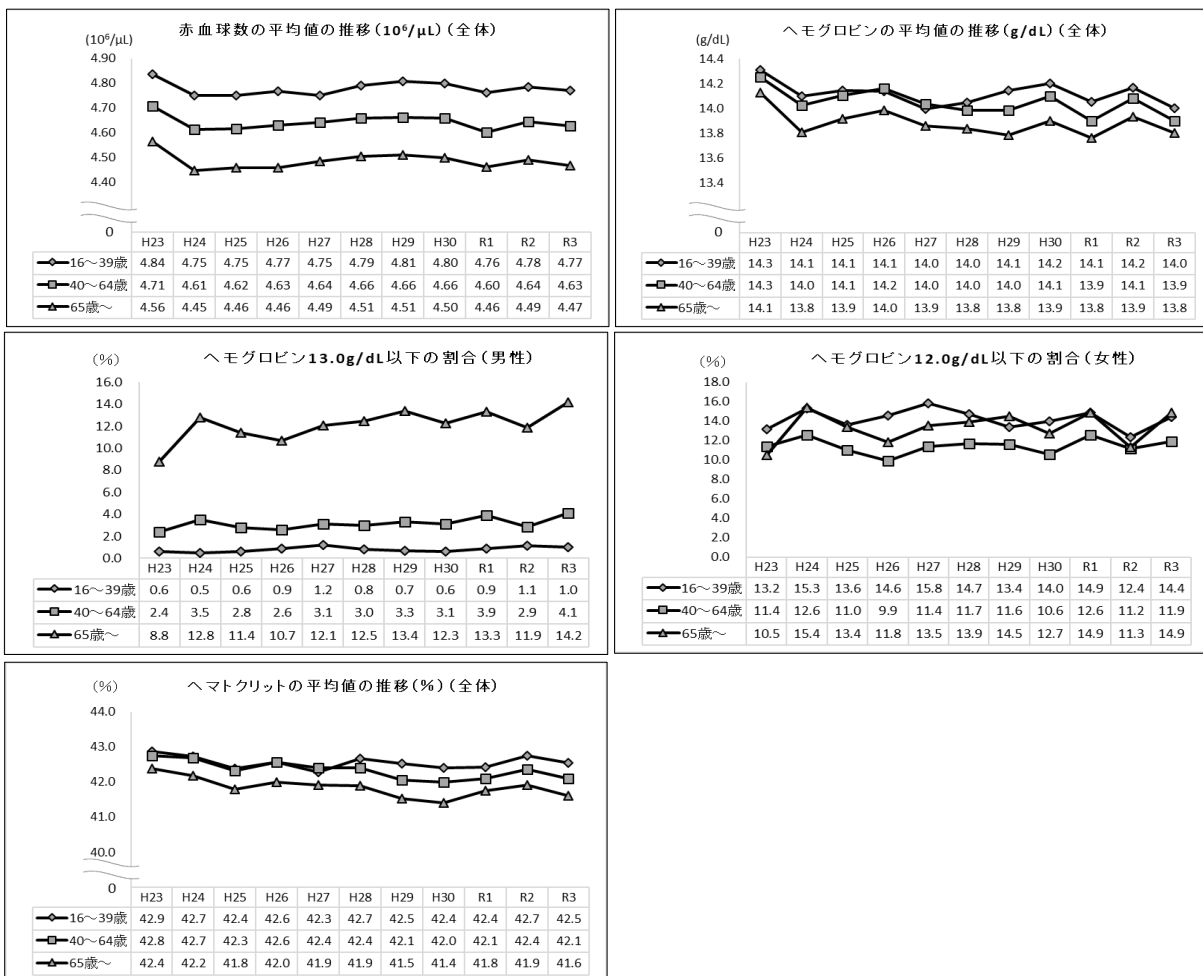
末梢血液検査（赤血球、ヘモグロビン、ヘマトクリット）

1 結果

赤血球数およびヘモグロビンの平均値は、全ての年齢区分で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少がみられたが、その後は一定の傾向を示さなかった。

ヘモグロビン 13.0g/dL 以下の男性の割合は、65 歳以上で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて増加し、その後は一定の傾向を示さなかった。12.0g/dL 以下の女性の割合は、65 歳以上で平成 23 年度から平成 24 年度にかけて増加し、その後は減少と増加を繰り返す傾向がみられた。

ヘマトクリットは、全ての年齢区分において、大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリットの平均値の推移を記載した。

ヘモグロビン男性 13.0 g/dL 以下、女性 12.0g/dL 以下は WHO の貧血の基準。

3 参考基準値

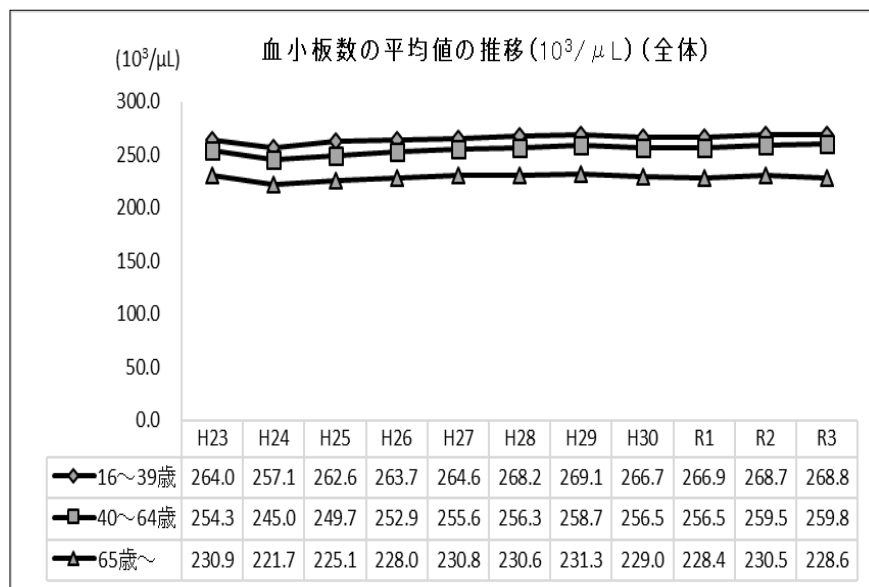
| 項目名称 | 単位 | | 下限 | 上限 |
|---------|---------------------|---|------|------|
| 赤血球数 | 10 ⁶ /μL | 男 | 4.35 | 5.55 |
| | | 女 | 3.86 | 4.92 |
| ヘモグロビン | g/dL | 男 | 13.7 | 16.8 |
| | | 女 | 11.6 | 14.8 |
| ヘマトクリット | % | 男 | 40.7 | 50.1 |
| | | 女 | 35.1 | 44.4 |

出典：日本臨床検査医学会作成「臨床検査のガイドライン JSLM2021」

末梢血液検査（血小板数）

1 結果

血小板数の平均値では、全ての年齢区分で、平成 23 年度から令和 3 年度まで大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

血小板数の平均値の推移を記載した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

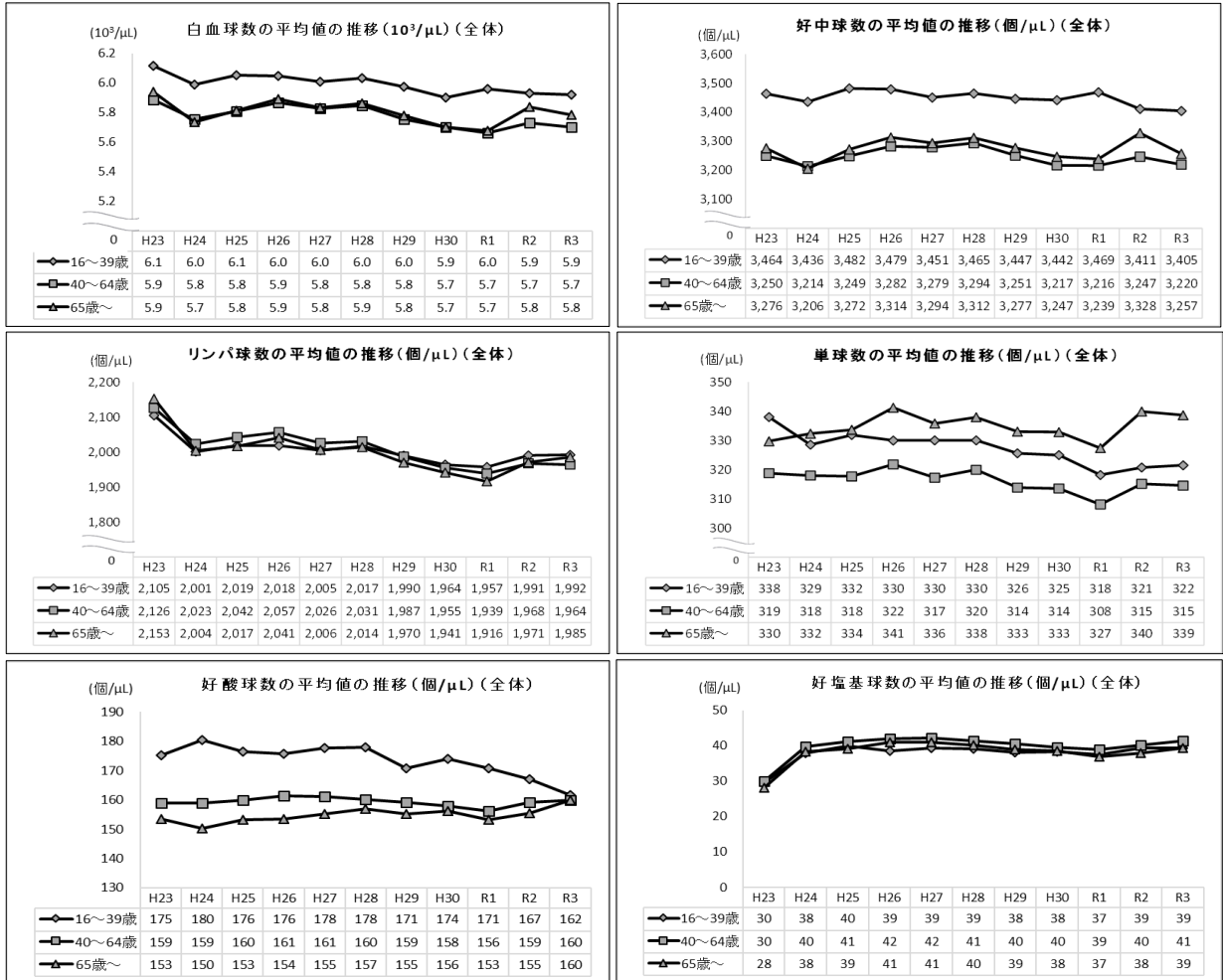
| 判定区分 項目 | 基準範囲内 | 軽度異常 | | 異常 | | 単 位 |
|------------|---------|--------|---------|-------|--------|---------------------------|
| | | 90~129 | 370~449 | 89 以下 | 450 以上 | |
| 血小板数 | 130~369 | 90~129 | 370~449 | 89 以下 | 450 以上 | $\times 10^3/\mu\text{L}$ |

末梢血液検査（白血球数、白血球分画）

1 結果

白血球数の平均値は、全ての年齢区分で、平成23年度から令和3年度まで大きな変化はみられなかった。

白血球分画では、好中球数、リンパ球数、単球数、好酸球数および好塩基球数の平均値では、全ての年齢区分において、平成23年度から令和3年度まで一定の傾向を示さなかった。



2 グラフの説明

白血球数、白血球分画の平均値の推移を記載した。

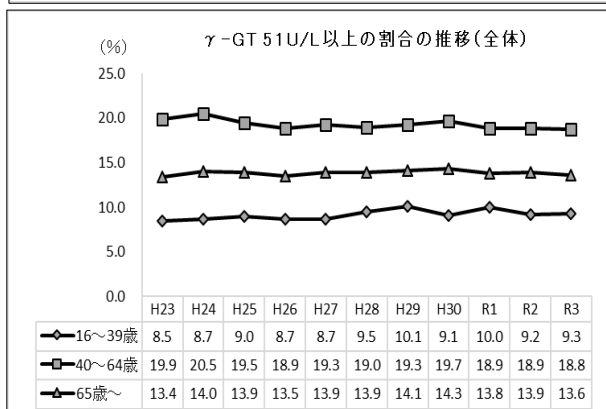
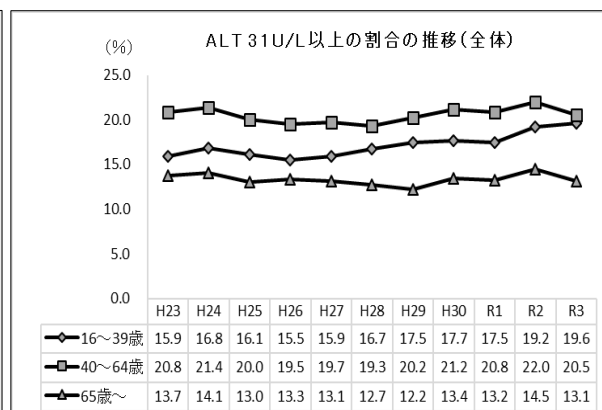
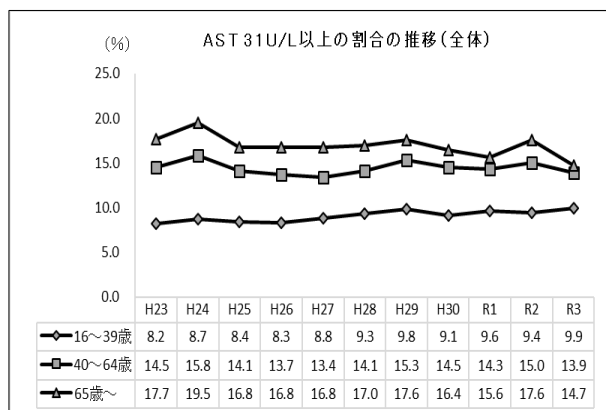
3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

| 項目 | 判定区分 | | 軽度異常 | 異常 | | 単位 |
|----------------|---------|-----------|---------|----------|----------------|----------------------|
| | 基準範囲内 | | | | | |
| 白血球数 | 4.0～9.5 | | 3.0～3.9 | 9.6～11.0 | 2.9以下 11.1以上 | ×10 ³ /μL |
| 白血球分画 (参考値) | 好中球 | 40.0～75.0 | | | | % |
| | リンパ球 | 20.0～55.0 | | | | |
| | 単球 | 0～12.0 | | | | |
| | 好酸球 | 0～10.0 | | | | |
| | 好塩基球 | 0～3.0 | | | | |

肝機能 (AST、ALT、 γ -GT)

1 結果

AST 31 U/L 以上の割合、ALT 31 U/L 以上の割合および γ -GT 51 U/L 以上の割合は、全ての年齢区分において大きな変化はみられなかった。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、肝機能異常を判定した。

3 参考基準値 (集団健診・個別健診で使用している判定基準)

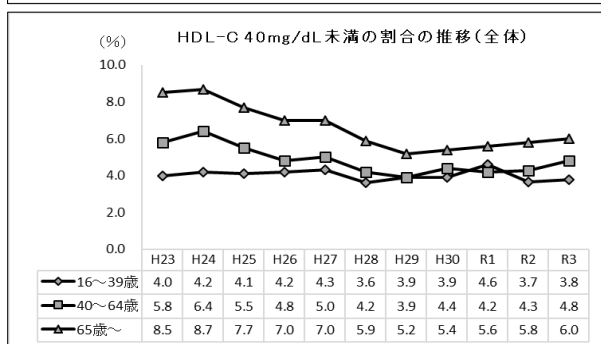
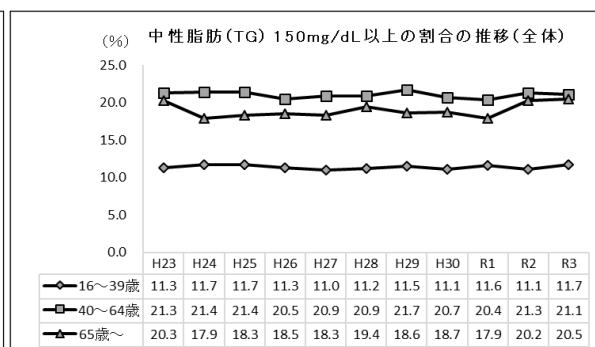
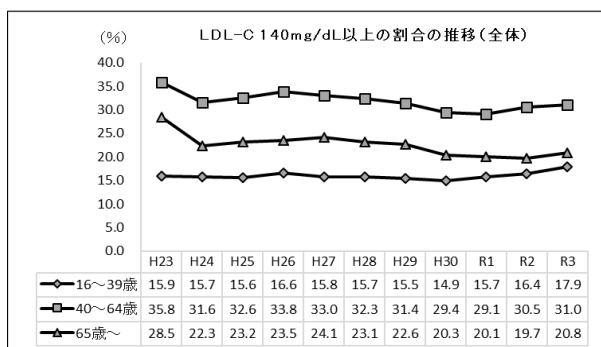
| 項目 | 判定区分 | | | 単位 |
|--------------|-------|--------|--------|-----|
| | 基準範囲内 | 軽度異常 | 異常 | |
| AST (GOT) | 30 以下 | 31~50 | 51 以上 | U/L |
| ALT (GPT) | 30 以下 | 31~50 | 51 以上 | U/L |
| γ -GT | 50 以下 | 51~100 | 101 以上 | U/L |

脂質 (LDL コレステロール、中性脂肪、HDL コレステロール)

1 結果

LDL-C 140mg/dL 以上の割合および中性脂肪 150mg/dL 以上の割合は、65 歳以上では平成 23 年度から平成 24 年度にかけてやや減少傾向がみられたが、その後は大きな変化はみられなかった。

HDL-C 40mg/dL 未満の割合は、65 歳以上では平成 23 年度から平成 29 年度にかけて減少傾向がみられたが、その後はやや増加する傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、脂質異常症を判定した。

3 参考基準値

脂質異常症診断基準 (空腹時採血)

| | | |
|----------------|---------------|--------------------|
| LDL コレステロール | 140 mg/dL 以上 | 高 LDL コレステロール血症 |
| | 120~139 mg/dL | 境界域高 LDL コレステロール血症 |
| HDL コレステロール | 40 mg/dL 未満 | 低 HDL コレステロール血症 |
| トリグリセライド(中性脂肪) | 150 mg/dL 以上 | 高トリグリセライド血症 |

出典：日本動脈硬化学会作成「動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2022 年版」

糖（空腹時血糖、HbA1c）

1 結果

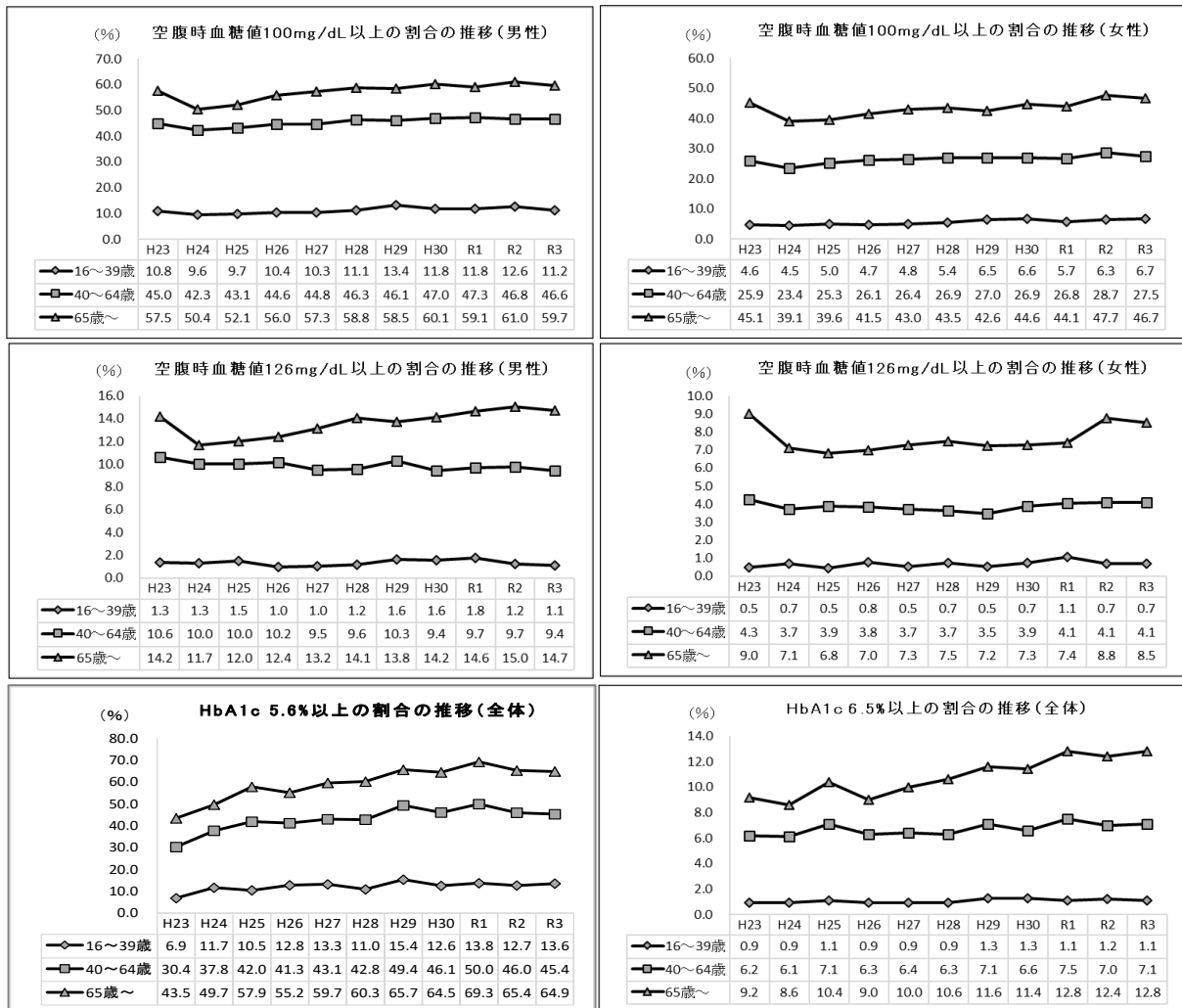
空腹時血糖値 100mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の男女で、平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、令和 3 年度はやや減少傾向がみられた。

空腹時血糖値 126 mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の男性で、平成 23 年度から平成 24 年度にかけて減少傾向がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、令和 3 年度はやや減少傾向がみられた。

空腹時血糖値 126 mg/dL 以上の割合は、65 歳以上の女性で、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて減少傾向がみられ、その後、令和 2 年度にかけてやや増加する傾向がみられたが、令和 3 年度はやや減少傾向がみられた。

HbA1c5.6%以上の割合は、40 歳以上において平成 23 年度から令和元年度にかけて増加傾向がみられた。その後、令和 3 年度にかけてはやや減少する傾向がみられたが、平成 23 年度と比較すると増加している。

糖尿病（HbA1c6.5%以上）の割合は、65 歳以上で、平成 23 年度から令和 3 年度まで増加傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに血糖高値（空腹時血糖値 100mg/dL 以上、HbA1c5.6%以上）、糖尿病（空腹時血糖値 126mg/dL 以上、HbA1c6.5%以上）を判定した。

3 参考基準値

空腹時血糖値および 75gOGTT による判定区分と判定基準

| | 血糖測定時間 | | | 判定区分 |
|----------------|-------------------|-------|--------------|------|
| | 空腹時 | ◀または▶ | 負荷後 2 時間 | |
| 血糖値 (静脈血漿値) | 126 mg/dL 以上 | ◀または▶ | 200 mg/dL 以上 | 糖尿病型 |
| | 糖尿病型にも正常型にも属さないもの | | | 境界型 |
| | 110 mg/dL 未満 | ◀および▶ | 140 mg/dL 未満 | 正常型 |

- ①早朝空腹時血糖値 126 mg/dL 以上
- ②75 g OGTT で 2 時間値 200 mg/dL 以上
- ③随時血糖値 200 mg/dL 以上
- ④HbA1c が 6.5%以上

①～④のいずれかが確認された場合は「糖尿病型」と判定する。

- ⑤早朝空腹時血糖値 110 mg/dL 未満
- ⑥75 g OGTT で 2 時間値 140 mg/dL 未満

⑤および⑥の血糖値が確認された場合には「正常型」と判定する。

- 上記の「糖尿病型」「正常型」いずれにも属さない場合は「境界型」と判定する。

出典：日本糖尿病学会作成「糖尿病治療ガイド 2022-2023」より作成

※この資料では、日本糖尿病学会の「糖尿病の分類と診断基準に関する委員会報告（2012）」にある「疫学調査：糖尿病の頻度推定を目的とする場合は、1 回の検査だけによる『糖尿病型』の判定を『糖尿病』と読み替えてもよい。この場合、HbA1c (NGSP) $\geq 6.5\%$ (HbA1c (JDS) $\geq 6.1\%$) であれば『糖尿病』として扱う。」の記載に基づき、「糖尿病型」を「糖尿病」と読み替えることとする。

詳細な健診の項目（医師の判断による追加項目）を実施できる基準

| | |
|----|---|
| 血糖 | 空腹時血糖値が 100 mg/dL 以上、HbA1c (NGSP 値) 5.6%以上 又は随時血糖値が 100 mg/dL 以上 |
|----|---|

出典：厚生労働省「特定健康診査・特定保健指導の円滑な実施に向けた手引き（第 3.2 版）2021 年」より作成

腎機能（血清クレアチニン、eGFR）

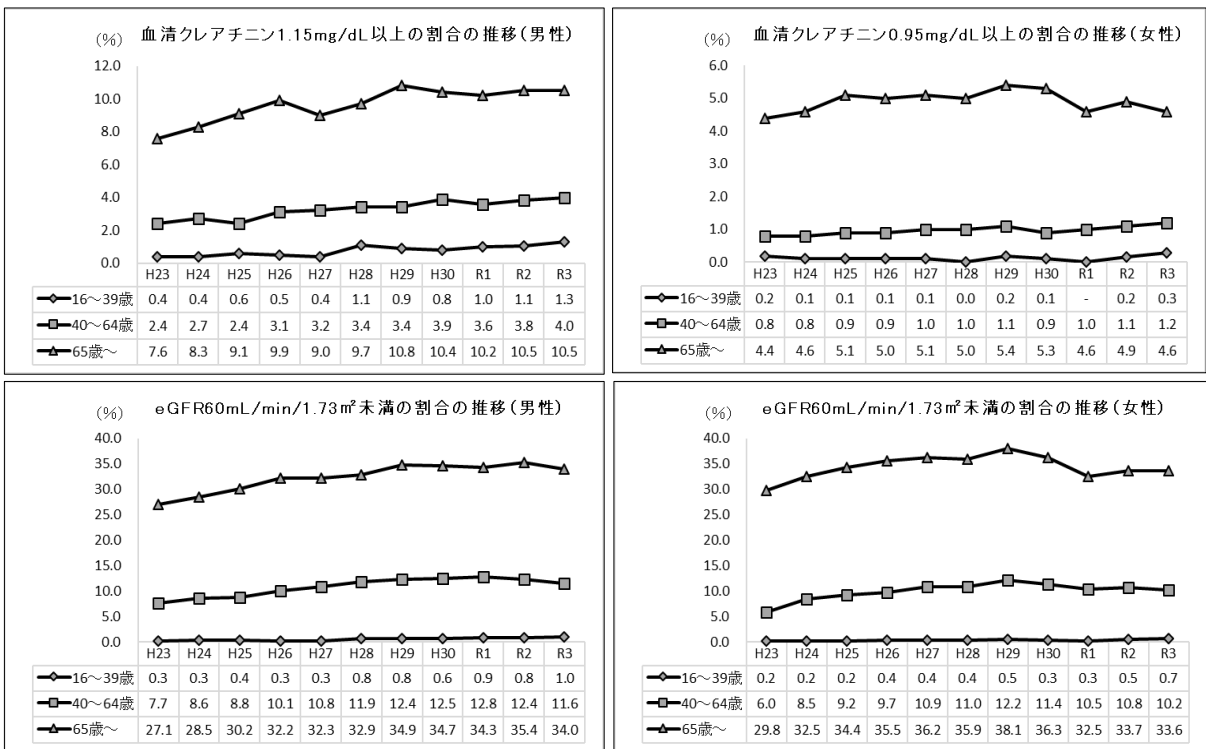
1 結果

血清クレアチニン 1.15mg/dL 以上の男性の割合は、40～64 歳では平成 23 年度から令和 3 年度にかけてやや増加傾向がみられた。65 歳以上では、平成 29 年度まで増加傾向がみられたが、その後、大きな変化はみられなかった。

血清クレアチニン 0.95mg/dL 以上の女性の割合は、65 歳以上では平成 23 年度から平成 29 年度にかけてやや増加傾向がみられたが、その後は減少傾向がみられた。

eGFR60mL/min/1.73m² 未満の割合は、40～64 歳の男性で、平成 23 年度から令和元年度にかけて増加傾向がみられたが、その後はやや減少する傾向がみられた。65 歳以上では、平成 23 年度から令和 2 年度にかけて増加傾向がみられ、令和 3 年度はやや減少傾向がみられた。

eGFR60mL/min/1.73m² 未満の割合は、40 歳以上の女性で、平成 23 年度から平成 29 年度にかけて増加傾向にあったが、その後は減少傾向がみられた。



2 グラフの説明

慢性腎臓病の判定基準である eGFR60 mL/min./1.73m² 未満の割合を示した。

3 参考基準値（集団健診・個別健診で使用している判定基準）

| 項目 | 判定区分 | 基準範囲内 | 軽度異常 | 異常 | 単位 |
|----------------|-------------------|-----------|-----------|-----------|----------------------------|
| | 血清クレアチニン (酵素法) | 男 | 0.45～1.14 | 1.15～1.34 | |
| | 女 | 0.35～0.94 | 0.95～1.14 | 1.15 以上 | |
| eGFR(推算糸球体濾過量) | | 60.0 以上 | 45.0～59.9 | 44.9 以下 | mL/min./1.73m ² |

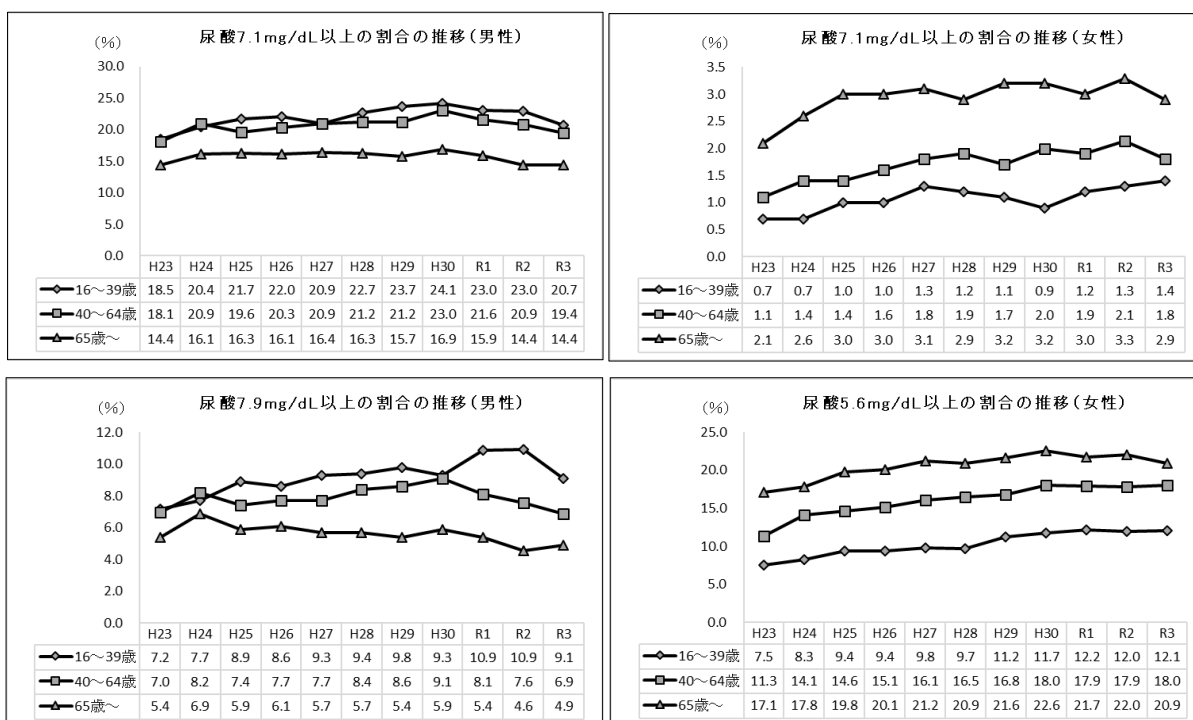
尿酸

1 結果

尿酸値 7.1mg/dL 以上の割合は、男性の全ての年齢区分において平成 23 年度から平成 30 年度まで増加傾向がみられたが、その後、令和 3 年度にかけてはわずかに減少傾向がみられた。また、女性の全ての年齢区分において大きな変化はみられなかった。

尿酸値 7.9mg/dL 以上の割合は、16～39 歳の男性では、平成 23 年度から令和 2 年度にかけて増加傾向がみられたが、令和 3 年度は減少する傾向がみられた。

尿酸値 5.6mg/dL 以上の割合は、16～39 歳、40～64 歳の女性では、平成 23 年度から令和 3 年度にかけて増加傾向がみられた。



2 グラフの説明

参考基準値をもとに、高尿酸血症を判定した。

3 参考基準値

| | |
|--|--|
| 日本痛風・尿酸核学会作成「高尿酸血症・痛風の治療ガイドライン」による高尿酸血症の定義 | 尿酸値 7.1mg/dL 以上 |
| 日本臨床検査標準協議会設定共用基準範囲の上限を超える値 | 尿酸値男性 7.9mg/dL 以上 および女性 5.6mg/dL 以上 |